

## スミス・マカロック・マルクス

馬 場 宏 二

2007.11.26～12.17

これは、経済理論学会第55回大会における報告「スミス・マルクスの資料操作とマカロック」の詳細<sup>(1)</sup>である。何しろ報告時間が30分だから、細部の説明や文献出所など、肝心でも触れられない部分が多々残る。それらを補ってここに文章化しておく<sup>(2)</sup>。

### 1. 対象と視角

『国富論』(1776)と『経済学批判』(1859)を含む『資本論』(1867)との、内容論理でなく先行研究への言及を探索する。一見、小姑的揚げ足取り作業の連続である。ただのアラサガシと解され兼ねないが、狙いは経済学の脱神学化である。すなわち、両書いづれも一世を画す体系と評価され、多くの解釈や研究や注釈が現れる等經典化されており、スミス(Adam Smith 1723～1790)、マルクス(Karl Marx 1818～1883)それぞれに神格化されている。マルクスの場合、つい先達てまでコミンテルンの政治的権威を背景とした神格化が普通であり、それが多少破れた今日でも、マルクス無謬説的注解は維持されており、近年ではMEGAを背景にした再神格化も試みられている。スミスの場合は、表面上もう少し学問的な扱いがなされるが、ブルジョアイデオロギーの代表作であるだけに、ブルジョア経済学によって繰り返し引証基準とされ、聖典化が続いている。宗教化神学化は社会科学を凍結させる。特別な素養を持たない素直な読者なら誰でも理解出来る、資料操作上の欠陥を手掛かりとして解凍し、経済学の脱神学化を図る。それが、延いてはスミスやマルクスの人格的特性を浮き彫りにし、古典の味わいを増すはずである。

改めて言うまでもないが、両書の文献挙証は極端に違う。『資本論』の文献註は、理論の展開に沿って各論点の先行説を指摘し、学説の流れや文献考証まで含んで、それ自身独立の経済学史になるほど詳しい。知的誠実、学問的良心の代表作とも言える。他方『国富論』には殆ど出典註がなく、希に断片的事実に出所註が付く。経済学的理論は、第4編第9章で扱ったフィジオクラート以外には取り上げられない。経済学として体系性を示した、ペティ(Sir William Petty 1623～1687)、マーチン(Henry Martyn 1665～1721)、ハリス(Joseph Harris 1702～1764)、スチュアート(Sir James Denham Steuart 1712～1780)、チュルゴ(Anne Robert Jaque Turgot 1727～1780)の先学五人は完全に無視され、隠蔽・抹殺されている。名前を一度挙げただけのカンティロン(Richard Cantillon 1680-1690～1734?)もほぼ同様な扱いである。後世の『国富論』編集者キャンナン(Edwin Cannan, 『国富論』1904年版)やキャンベル、スキナー、トッド(R.H.Cambell, A.S.Skinner, W.B.Todd, 『国富論』1977年版)は、隠された典拠の詮索に多大の労を費したが、未だに不完全である。この徹底的な先学隠しは、著作権に煩くなかった当時の著

作慣行の許容範囲を越えた、新興の学問である経済学 Political Economy における独創性を自己主張するための巧妙な偽装である。マルクスやシュムペーター (Joseph A. Schumpeter 1883~1950) がそれを見破っていたことは後に触れる。この偽装が功を奏して、経済学はスミスに始まると説くのが常識となり、学界でも、『国富論』を指す『経済学の生誕』が高い評価を得ている。だが無論、これと『資本論』を同列に並べることはできない。学問的良心に大差があるからである。

もつとも、マルクスも満点ではなかった。細かく拾えば、出典を自ら確かめないままの孫引き<sup>(3)</sup>や、おそらく数値感覚の悪さゆえの年次の誤りも複数ある<sup>(4)</sup>。それらは無論ご愛嬌と片付けても良い程度のものだが、何人かの先行者に対する偏見は無視出来ない。セイ (J.B.Say, 1767~1832) とマカロック (John Ramsay McChulloch 1789~1864) に対する罵言は、単なる悪口の範囲を越えて、彼等の学問的貢献を一切否認する。同じく罵言を多発しても、マルサス (Thomas Robert Malthus 1766~1834) やシーニア (Nassor William Senior 1790~1864) の場合にはどこかで一人前の経済学者扱いをし、著作を批判的ながら丹念に読んでいるが、マカロックの場合などは、理解不能なほどドギツイ悪罵を浴びせたばかりか、有用な論点が書かれている場合でもおよそ取り込もうとしない。それがマルクス自身に跳ね返って、いくつかの返り傷を生じるとともに、マルクス継承者達のマカロック研究を萎縮させて来たのである

## 2. スミスの先学隠し

スミスの書簡集<sup>(5)</sup>が出版され、スミスが、『国富論』では全く無視した、ペティ、チュルゴ、スチュアートをかなり詳しく識っていたことが明らかになった。チュルゴについては、ロンドンでルソーと抗争中のヒュームを宥めるためにパリから出した手紙の中に、同意見のフランス人何人かの名を挙げ、中でチュルゴについて「この人は貴兄の友人となるに相応しい人です」と特記している<sup>(6)</sup>ことを指摘するに止め、ここでは「ポリティカル・エコノミーに直接関わる二者を取り上げる。

### A—ペティの部<sup>(7)</sup>

スミスはエドモンド・フィッツモーリスを自宅に置いてグラスゴー大学に通わせながら個人教授し、その父シェルバーン伯爵宛ての報告に「あなた方の尊敬すべき祖先サー・ウィリアム・ペティ」<sup>(8)</sup>と書いた。因にシェルバーン一世はペティの息チャールズで、発禁になった『政治算術』を父の死後発行した人<sup>(9)</sup>。名宛人のシェルバーン二世はペティの娘アンの孫で、ペティの遺産相続の中心であるランズダウン侯爵一世となった (Oxford Dictionary of National Biography による)。エドモンドは後に政治家となり、また歴史家として『サー・ウィリアム・ペティの生涯』<sup>(10)</sup>を著わした。つまりスミスは、大資産家であるペティの遺族と、際立って親交のある著作者だったのである。その彼が『国富論』でペティの氏名も書名も一切挙げず、「政治算術」を貶めることでペティの存在を払拭する小細工を施した。スミスの先学無視が、単なる著作慣行でないことはこの一事を以てしても判るであろう。

『国富論』第4編第5章の穀物輸出奨励金論難の中で、イギリス穀物の輸出・輸入依存度の数値を挙げた後、スミスは「私は政治算術を信用しない。だからこの数値が正確であることを保証しない」<sup>(11)</sup>と付け加えた。数値はチャールズ・スミス『穀物三論』<sup>(12)</sup>にあり、『国富論』は同書に何回か依拠したばかりか「ひじょうに事情に通じた著者」<sup>(13)</sup>と繰り返している。何度もホメた人物が算出した数値を、最後の引用で自分が政治算術 Political Arithmetic を信用しないから正確さを保証しないと、チャールズが政治算術という語を使っていたわけでもないのに、ツッパネた。どこかでペティが「政治算術」に不信を表明しなかったのだろう。因に『国富論』では「政治算術」は他に、チャールズ・ダヴィナントがクレゴリ・キングを「政治算術の達人」とホメたと使われており、「この術」と代名詞的に使ったのまで含めると三度<sup>(14)</sup>になるが、スミス生前版『国富論』の索引には全く拾ってない。「政治経済学」を多用し、索引では実際の用例以外の代名詞的用法まで加えて積極的に拾ったのとは極めて対照的である<sup>(15)</sup>。

シュムペーターもこの点を問題にした。「ペティの人を鼓舞するようなメッセージや示唆に富むプログラムはスコットランドの教授(アダム・スミス)の堅苦しい筆致のなかに枯れ萎んでしまって250年間大多数の経済学者には殆ど看過されてきたのである。アダム・スミスが政治算術には大して信頼を置かないと宣言した時、彼はその性分に従ってただ大事をとったに過ぎない」<sup>(16)</sup>、と。持って回った文章で、特に「250年」の意味が解からないが、「政治算術」を貶めたことがペティ消去の効果を持ったと捉えていることは確かである。シュムペーターはチャールズ・スミスの本やアダム・スミスによるその使用法に言及していないが、それを含めればアダム・スミスが「政治算術」を貶めたことは一層明瞭である。

## B—スチュアートの部<sup>(17)</sup>

スミスはパルトニー宛の手紙で書いている。「現在出版の準備をしている本の中で、私は貴方が指摘してくださった論点を充分かつ明瞭に扱っておきました。その抜粋をお送りしようと考えましたが、読み返してみると他の部分と簡単に分離出来ないほど入り混じっているのです。サー・ジェームズ・スチュアートの本については私は貴方と同じ意見です。私はそれに一度も言及することなしに、その中の全ての誤った点を、私の本の中で極めて明瞭に(Clear and distinct)論破しておいたと自負しています」<sup>(18)</sup>。この手紙の要旨は岩波文庫版『国富論』<sup>(19)</sup>に紹介されているから周知であろうが、隠蔽の露骨な表明である。論破するなら何書何ページはかくかくの理由によって誤りだと明示しなければ論争にもなるまい。スミスは負けるのを怖れたか<sup>(20)</sup>、それ以上に『国富論』に展開した自分の世界にスチュアートの名を残すことを嫌ったか。いずれにせよ「論破」は嫌悪の表現であっても空手形に終わるしかなかった。

ここでは、通常解釈<sup>(21)</sup>に従って、「スチュアートの本」を『経済学原理』と解しておくが、割註的に言えば、これはあるいは彼の『ベンガルの鑄貨の現状に適用された貨幣の諸原理』<sup>(22)</sup>なのかも知れない。東インド会社が、インドの貨幣問題に当面して理論的顧問を求めた。スミスも候補になったが、『原理』の他『スコットランド・ラナーク地方の金利の考察』もあり経済

学者として先行していたスチュアートが顧問になり、このベンガル貨幣論<sup>(23)</sup>を書いた。それは1772年に出版されたから、その本が東インド会社重役で議員のパートニー(前名ウィリアム・ジョンストン・スミス任命に好意的だった)の手元にあっても、また同年のうちにスミスがその件で手紙を書いているにもかかわらず不思議はない。そうならこの手紙は、理論体系一般が問題なのではなく、もともと不利な顧問争いに敗退したスミスが、俗物根性丸出しに極めて現世的な嫉妬、それもやや逆恨み的な嫉妬によって書いたことになるし、そう解しても辻褃は合う。ただ筆者は、果たしてパートニーがスチュアートのベンガル貨幣論をその時に持っていたかといったレヴェルの実証は出来ないから、通説に従った解釈に戻る。

おそらくスミスは、長い間経済学の著作を志向していた。『道徳感情論』には経済学の気は殆どない。その後、グラスゴー大学講義で法学・経済学へかなり踏み込んだが、ここではまだ「政治経済学」を使っていない<sup>(24)</sup>。その後訪れたフランスでフィジオクラートの影響を受け、経済学へさらに進んだものの、生憎フィジオクラートは *economie politique* の語を使わなかった<sup>(25)</sup>。スミスの構想が未完成で、おそらくまだ「経済学」Political Economyのキーワードに結晶しないうちに、スチュアートが「政治経済学」を書名とし、中で明確に定義した体系書を刊行した<sup>(26)</sup>。先を越された不快感と嫉妬がこうした姑息な表現をとったと解し得る。

因に、英語のPolitical Economyを最初に使ったのは、ペティ『アイルランドの政治的解剖』で<sup>(27)</sup>、土地と労働の価値的換算を指す。この語はモンクレチアン(Antoine de Montchrétien, 1575~1621)『経済学概論』の書名にある *oeconomie politique* に由来する可能性がある<sup>(28)</sup>。スチュアートは『原理』で数値に関してペティの名を数回挙げているから、どこかでペティの「政治経済学」を記憶していたのかも知れない。ただ、もっと奇妙なのはスミス自身で、彼はカンティロン『商業試論』を手元に置き、キャナンの考証によるだけでも『国富論』で10回ほど依拠している<sup>(29)</sup>。この愛読書はペティを本格的な議論の対象として三回取り上げ、その中に、書名こそないが『アイルランドの政治的解剖』に該当する著書も含まれる<sup>(30)</sup>。スミスが素直にカンティロンに依って文献を探索すれば、「政治経済学」はもっと早く掴めたはずである。先学無視が自説に跳ね返った自業自得だったのではないか?、あるいはさらに、スチュアートの "An Inquiry into the Principles of Political Economy" とチュルゴの "Reflexions sur la formation et la distribution des richesses" の合成が、スミス自身の書名『国富論』 "An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations" だった<sup>(31)</sup> のではないか?

『国富論』1981年版の编者スキナーは、スチュアート『経済学原理』1966年版の编者でもある。それだけに現行標準版『国富論』中の『経済学原理』と対応する論点の指摘は詳細を極め、『国富論』编者註に『原理』が挙げられた箇所は計30を越える。無論全てがスチュアート独自の影響ではなく、20箇所くらいは他の先学とともにスチュアートも述べ、スミスも同様に述べた論点である。ひとまずそれを除くと、スミスの10箇所はスチュアート『原理』を踏まえて書かれていることになる。その半数は、编者が「興味ある」と註記した点を含め、スミスがスチュアートに追随して書いた<sup>(32)</sup>ものと解し得る。論破どころか模倣の方が多い。残る数箇所が、アムステルダム預金銀行やローの銀行についての記述で、スチュアートの方が遙に立ち入って同情的に述べていた

のを、スミスが素っ気無く書いた部分である。これで「明白に論破した」などと言えるわけがない。スミスの屈折した心情は「第四版の読者に」に最も露骨に現れている。アムステルダム銀行に関する資料を提供してくれたヘンリー・ホープへ謝辞を述べている中に「この主題に関し、これまで満足すべき知的な印刷物は出たことがなかった」<sup>(33)</sup>と記した。あれだけの紙幅を費やして同銀行を詳論したスチュアート『原理』<sup>(34)</sup>は、知的な印刷物ではなかったと言うのである。

スキナーほど緻密ではないが、マルクスはもっと論理的にスミスの後ろ暗さを指摘していた。『経済学批判』の貨幣論史で、「スミスはスチュアートの貨幣理論をだまっ採用した」「彼が事実上たくさん儲けたもとである、わずかなものをあたえてくれた源泉を、こまかく気をつけて隠している」「かれは、厳密に定式化するとかれの先行者たちと[独創部分の]差し引き勘定をしなければならなくなるころでは、問題の要点をはずすというやり方を、たびたびえらんでいる」「アダムスミスのこのあまり無邪気でないまちがい」<sup>(35)</sup>等、恐ろしく的確な特徴付けである。それをスミスの書簡もキャンナンやスキナーの考証もない時点で書いた。もともと、ここの論点ではスミスに辛すぎたとの自己批判をすぐ付け加えている<sup>(36)</sup>が、スミスに対する態度は変わらない。『資本論』の分業論でも、「スミスは分業について新しいことを何一つ言っていない」<sup>(37)</sup>と斬って落した。分業論が売り物のスミスに対する甚だ衝撃的な言明だが、前後に注記されたペティやマーチンらが百年近く前にはるかに大規模で緻密な「分業」論を展開していたことを考えれば当然である。因にペティ『政治算術』『政治算術別論』の「分業」論を、マルクスは『経済学批判』の商品論史にある同書最長の注<sup>(38)</sup>で賞揚し、マーチンの「分業」論については『資本論』で繰り返し評価方々引用したが<sup>(39)</sup>、マカロックは『経済学文献分類目録』でスミスを越えると述べ、著者名推測まで含めて遙に詳しく紹介し激賞していた。

マルクスがスミスとリカードを「古典派経済学最良の代表者」<sup>(40)</sup>と並べて表敬しながら、個別に扱う時スミスのみあげつらったのは、リカードの知的誠実さに比べてスミスの一見紳士風な取繕いが薄汚く見えたためではなかろうか。

### 3. マカロックの功績

マカロック(1789~1864)は、理論家としての一貫性や独創性には欠ける。だが該博な文献知識を持ち、経済学史に多大の貢献をした。彼はいわばスミスと表裏の関係にある。スミスが無視し隠蔽した先行研究をほとんど全て紹介し評価し、後世の利用を可能にする源泉となった。にもかかわらず、後世の評価が奇妙に低い。そもそも彼は経済学史家としてきちんと位置づけられて来たのだろうか。いくつかあるケアレス・ミステークをあげつらう<sup>(41)</sup>ことで、丸ごと無視されてきたのか？

彼が体系的に書いた初期の著作は、叙述形式からして経済学史的であった。1824年刊『経済学の勃興・進歩・目的・重要性に関する講義』<sup>(42)</sup>、翌1825年の『経済学原理』<sup>(43)</sup>いずれもそうである。彼は前著で既にペティやマーチンに注目<sup>(44)</sup>しており、後著では、ペティがリカードに通じる労働価値説を唱えたことを明示した<sup>(45)</sup>。ペティが労働価値説の元祖だとする指摘はこれが

最初ではなく、ガニル『経済学体系』の1821年版<sup>(46)</sup>に次ぐが、リカードとの共通性を強調したのはマカロック独自の貢献であろう。

1845年の『経済学文献分類目録』<sup>(47)</sup>は、表面上当時のエリートの教養のための経済学読書案内だが、恐るべき博識の産物である。既成の経済学文献およそ1000点を網羅し、これを経済学総論、貿易・貿易政策、貨幣銀行為替、道路運河鉄道等、分野別に20章に分類し、分野毎に出版年次順に配列する。個別には書名・版・出版年・出版地の、論文の場合には掲載誌、年・号の、書誌学的記述を大型活字で、重要文献の場合には書名をさらにエジプト体にして目立たせ、その後にかなり細かい活字で、出版の経緯や内容の要約やマカロック自身の評価を長短さまざまに付け加える。『国富論』は版毎に配列して一括紹介し、ペティは著作に応じて貨幣論・政治算術・租税論・グラント『死亡率表』との関わりで人口論と章別に掲示しながらほぼ全貌を示す。「サー・ウィリアム・ペティは17世紀でもっとも注目すべき人物である」として略歴を簡潔正確に述べた後、「ペティの資質を継承している家系にとって彼の著作の全集を刊行することほど彼の記憶の顕彰になることはないであろう」<sup>(48)</sup>と、挑発的に全集刊行を促した。その文が直接にも、ロッシヤー<sup>(49)</sup>やイングラム<sup>(50)</sup>を通じて間接にも、ランズダウン侯爵家を動かして、『サー・ウィリアム・ペティ経済学著作集』を刊行させたのである。このことは編者ハルの序文に示されている<sup>(51)</sup>。因にマルクスもペティ著作集の欠如を指摘した<sup>(52)</sup>が、一言多い憎まれ口を加えたために、著作集刊行の側圧を加えた功労者のなかに含めてもらえなかった<sup>(53)</sup>。

『経済学文献分類目録』でマカロックはペティの他にも、忘れられていたヘンリー・マーチンやジョセフ・ハリスに改めて照明を当て、多くの字数を費やして賞揚した。さらに10年後ロンドン経済学クラブから、既に脱会していたマカロックに要請があり、彼はそれに応えて二つの名論集を編集した。『イギリス初期貿易論集選集』<sup>(54)</sup>と『希少重要貨幣論選集』<sup>(55)</sup>である。いずれも会員頒布用の少部数出版だが、希観本化した著作を8-10数点覆刻収録し、それに編者の解説を加えたものである。ページ数で特に多いのが、前著でマーチン『東インド貿易の諸考察』<sup>(56)</sup>、後著でハリス『貨幣・铸貨試論』<sup>(57)</sup>である。編者解説中の書誌学的記述に多少誤りがあるが、いずれも1856年刊行、マカロックすでに67歳である(もっとも彼はその後、大スポンサーだったオーヴァストーン卿のために、類似の名論集を都合4冊編集しているから、まだ学問的活力は保たれていたのだろう)。

ペティばかりかマーチンもハリスも、マカロックの手によって後世に継承されたのである。ことに後二者は、20世紀になると大抵の研究者はマカロック編の名論集で読んだようであり、その二名論集自体が希観本となっていた。日本の場合とりわけそうで<sup>(58)</sup>、戦後も高度成長期以前には、マカロック編の名論集が直接読めれば幸運という程度だった。因にマルクスはこの名論集が読めなかったであろう。彼は経済学クラブの会員ではなかったから、よほどの僥幸がない限り彼の眼には触れまい。マカロックをバカにした扱いからいささかの傷が生じていたのが、この選集に触れれば多少は埋められたろうか。それは何とも言いようがないが、マーチンは自力で発掘だけはしたものの、ハリスにはついに触れ得なかった。知っていれば、自らの価値形態論はともかく、スミス貨幣論の解釈はいささか変わったかも知れない。

それなのにマルクスはマカロックの功績を全く認めないばかりか、口を開けば悪罵を極め、それも後になるほどドギツクになった。世のマカロック評価が低いのは、専らこの現行版『資本論』の誹謗に由来するであろう。例えばセイに対してもマルクスは「バカ」を連発し、それがセイ不人気の一因であろうが、それでもマカロック非難ほど捻じれてはいないし数も少ない。ケインズが誤って「セイの法則」<sup>(59)</sup>と唱えたおかげで、現在でもセイ研究はいくらかは行なわれるが、マカロック研究はないに等しい<sup>(60)</sup>。マルクスがなぜかくも酷く罵ったか。差し当たり、一般的な反権威主義に嫉妬が交じったものと推測出来よう。マカロックはマルクスより30歳近く年長で、マルクスが本格的に英語で経済学の研究を始め、やがてロンドンで学問的には孤立した亡命者として暮らし始めたころ、マカロックは既に経済学教授を経てさらに高給の職に就き、最初の職業的経済学者とも呼ばれ、嚇々たる名声を誇っていた(ODNBによる)。教授を志してなれなかった亡命者が嫉妬混じりに反発しても不思議はない。『経済学批判』のころの評言はその程度で、無理な非難<sup>(61)</sup>もしながら、ドイツ人経済学者に比べればマカロックの方がマシだと述べてもいた<sup>(62)</sup>。『剰余価値学説史』のマカロック論が真つ当な内在的批判であるだけに、『資本論』現行版には別の要素が加わったと見るべきである。次項では悪罵の心理分析より前に誹謗の逆効果、マルクス自身が負った学問的傷に触れる。その分析を踏まえてはじめて、悪罵がいつそう酷くなった理由が推測可能になる。実はその程度に持って回らないと、『資本論』のマカロック誹謗は理解できないほど理不尽なのである。

## 4. マルクスの失点

資料操作において、スミスとは比較にならないとしてもマルクスが満点でないのは、主としてこのマカロック嫌いのために、マルクス自身の叙述に欠陥が残ったからである。それは労働価値説の起点に関する早トチリ、延いてはペティ評価の不充分と、マーチン説の継承における、書誌的・理論的両面に互る、奇妙な捻れを伴った不完全とに大別される。

### A—労働価値説史の早トチリ

『経済学批判』第一章A「商品の分析のための史的考察」で、マルクスは古典派経済学による労働の二重性の把握に基づく成果を、ペティ、ボアギルベール、フランクリン、フィジオクラート、スチュアート、スミス、リカード、シスモンディと、時代順・国順に並べて論評した。これがいささかカッコ良すぎて誤りを避け難くした。フランクリンは、実は年次の誤りを含みながらだが、イギリスのペティ、フランスのボアギルベールに次いでアメリカの代表として取り上げられ、「交換価値をはじめ意識的に、ほとんどだれにもわかるほど明晰に分析して労働時間に帰した」労働価値説の元祖だと捉えられている。

ところがマルクスが引用したフランクリンの文は、ペティ『租税貢納論』に含まれる労働価値説の言い換えに他ならなかった。「銀の価値も、ほかのすべてのものの価値と同じように、労働

によってはかることができる。たとえば、あるものは穀物の生産に従事し、ほかのものは銀を採掘し精錬するでしょう。一年の終わり…には、穀物の全生産高と銀の全生産高とは、それぞれおたがいの自然価格である。そしてもし穀物が20ブッシェル、銀が20オンスだとすれば、1オンスの銀は1ブッシェルの穀物の生産に用いられた労働のねうちがある。だが、いまもしもっと近く、もっと採掘しやすく、もっと豊饒な鉱山が発見されたために、以前の20オンスの銀を生産するのと同じ容易さで40オンスの銀が生産できるものとし、しかも20ブッシェルの穀物を生産するにはやはり以前と同じ量の労働が必要だとすると、もはや2オンスの銀は1ブッシェルの穀物の生産に用いられた以前と同じ労働以上のねうちはなく、以前は1オンスの銀のねうちがあった1ブッシェルの穀物は、ほかの事情がかわらなければ、いまでは2オンスの銀のねうちがあるであろう<sup>(63)</sup>。これをペティの「この穀物すなわち地代がイングランドの貨幣でどれほどに値するか…別の一人の人が、銀の生産される地方におもむき、そこでそれを採掘し、それを精錬し、それを他の人が穀物を栽培しているところにもってくるでしょう、そして同じ人がそれを貨幣に鑄造する等々のことをし、さらにこの人は、銀のために働いているあいだに、生計に必要な食物を集め、衣服も手に入れる等々をしましょう。…一人の人の銀は他の人の穀物と同一価値に評価されねばならない…一方はおそらく20オンス、他方は20ブツシエルであろうが、このことから、この穀物1ブッシェルの価値は銀1オンスであるという結果になる」「もしある人が、1ブッシェルの穀物を生産するのと同じ時間に、銀1オンスをペルーの大地のなかからロンドンにもってくることができるでしょう。この場合一方は他方の自然価格である。ところが、もし新しい・しかももっと楽な諸々の鉱山のおかげで、ある人がかつて1オンスを獲得したのと同じ容易さで、銀2オンスを獲得することができるならば、そのときには、他の条件にして等しい限り、穀物は1ブッシェルが10シリングでも、かつて1ブッシェルが5シリングであったのと同様に安価である、ということになる」<sup>(64)</sup>、と対比せよ。明らかにフランクリン説はペティの説を下敷きにした言い換え<sup>(65)</sup>である。

マルクスは両文の酷似に気づかなかった。直前に『政治算術』と『政治算術別論』を引いてペティの分業論を高く評価したが、『租税貢納論』は読んでいなかったのである。ただエンゲルスへの手紙、『経済学批判』を執筆中だと述べ「経済学批判のプラン」を示したことで有名な手紙<sup>(66)</sup>の後段に、労働量による価値規定は「ペティではじめて暗示的に現れ、リカードでは純粋に仕上げられた」と述べている。つまりマルクスはペティが労働価値説の元祖で、それがリカードに繋がることをうすうすは知っていた。そうならむしろフランクリンがいつ紛れ込んだかの方が問題になるが、そこは目下不明である<sup>(67)</sup>。ただ、十数年前に英文経済学の入門書としてマカロック『経済学文献分類目録』を読んでおり、近時には『経済学批判要綱』<sup>(68)</sup>の中で『経済学原理』に数回言及していたから、ペティ源流説が頭に入っていた可能性はある。それを意図的に無視するほどには、当時のマルクスはマカロック排撃的ではなかったろうが、しかしすでに『原理』でマカロックの理論的混乱や曖昧さを掴んでおり、名声の割りには水準が低いと捉えていた。ペティ源流説は『原理』の末尾に近いところにある註に出てくる。『要綱』の記録には『原理』をそこまで読み進んだ証拠はないが、読んだにしてもさほど重視せず、僅かに記憶の片隅に残る程度だっ



たのかも知れない。だからフランクリンの文に接した時、時代順に、しかもイギリス・フランス・アメリカと地理的に並べ得る型の良さに惹かれて、そちらに飛びついたものと見られる。マルクスが『租税貢納論』を丹念に読み抜粋したのは1863年、後に『剰余価値学説史』になるノートにおいてである。『租税貢納論』に伏在した労働価値説に気付くまでは、時代順国順に型を決めた快さを密かに誇っていたのではないか。だから軌道修正に手間が掛かったのである。

もう少し長期に亙ってマルクスの研究史に即して見る。新MEGAのブリュッセルノート<sup>(69)</sup>中に、ペティを取り上げた文献3冊からの抜粋がある。そのうち、ガニル『経済学体系』は、1821年再版では、労働価値説の原形としてペティの名を挙げたのに続いて『租税貢納論』中の上記労働価値説該当箇所を逐語的に仏訳しているが、マルクスはこの時には初版しか読んでいない。『剰余価値学説史』で再版も読んだことになっているが、その後評価を上げたようにも見えない。マルクスの読書歴に即せば次の機会が同年のマンチェスタノート<sup>(70)</sup>に現れるマカロック『経済学文献分類目録』である。同書はペティ『租税貢納論』の紹介では、その労働価値説がリカードを想起させることを述べていたが、新MEGAに示されるマルクスの同書抜粋からは、マカロックのペティ把握をマルクスが吸収したようには読めない。その次の機会が『経済学批判要綱』に示された『経済学原理』の検討だが、前述の如くマルクスはここでも機を逸した。マカロックは、マルクスが無視した註の中で、ペティの労働価値説の内容を整然と要約していたのである。

『剰余価値学説史』に至って初めて『租税貢納論』の労働価値説の詳しい抜粋が現れ、ここでようやく軌道修正が始まる。だがそれは、マルクスの強情とあいまって、遅々とした過程になった。まず1867年の『資本論』初版で、商品価値論を含む第一章からフランクリンの名が消えた。但しここにはペティはまだ登場しない。1873年の再版の追加註で「一流の経済学者のひとりウィリアム・ペティについて価値の性質を見抜いた有名なフランクリン」<sup>(71)</sup>と、辛うじて御正解に達した。だがまだ『租税貢納論』の労働価値説としては現れない。負け惜しみが見え見えで、註の文ではペティよりフランクリンの方が偉い経済学者であるかの如くである。これが無条件のペティ賛美に進んだのは、エンゲルス『反デューリング論』中でマルクスが担当した第二編第10章で、これには「最も天才的で最も独創的な経済学者」<sup>(72)</sup>という、後に公式化される高い評価が現れる。実はこうした最上級の賛辞ではペティの意義は捉えきれない。特に、労働価値説が最初の作『租税貢納論』のほんの片隅に現れ、著者自身それを「余論」とか「副次的論点」とか称して、その後の著作で一切繰り返さなかったことを掴んでいないと、せつかくの労働価値説が殆ど継承されずに来た理由は解明出来ない。しかしそうだとすると、マルクスは『経済学批判』の早トチリからここまで来るのに、18年を要したのである。

こうした軌道修正は、マルクスにとっても苦しい過程だったであろう。こちら余論めくが、マカロックに対する悪罵が『資本論』現行版でひときわドギツクなったのも、あるいはそのせいかも知れないと考えられるのである。

マルクスは『経済学批判』における自らの早トチリに気付いた。しかもそれは、予てから蔑視し続けたマカロックの『経済学原理』や『経済学文献分類目録』を、自分が素直に読んでおけば犯さずとも済んだ過ちだった。それに気付いたことを示す直接の資料はおそらくなからうが、『剰

余価値学説史』がペティの労働価値説を逐語的に丹念にノートしていたことは、間接的ながら決定的な証拠になる。当然マルクスは猛烈な自責の念に襲われたはずである。だが、並外れて自尊心の強いマルクスはこの自責の念を素直に表明出来ず、この際は全く罪のないマカロックに逆恨み的に八つ当たりした。『資本論』再版でのマカロック誹謗の連発はその現れだったろう。

現行版『資本論』第一巻には、10箇所以上マカロック非難がある。好奇心から一度掘り返したことがあり<sup>(73)</sup>、出来れば避けて通りたいが、それでは説得力に欠け、マルクス分析のつもりが単なるマルクス非難と誤解される危険がある。嬉しくはないが既述のマカロック非難の分析を改めて整理する。

まず「セイ、マカロックの徒」とコミで罵る場合が何回か<sup>(74)</sup>ある。スミスを卑俗化したセイ、リカードを卑俗化したマカロックの意味で、古典派の代表者スミス・リカードという評価の裏返しである。それとは別に個別に非難する場合もあり、セイに対しては単純に「バカ」と、都合3回書いているが、マカロックとなると、罵言の度合いも酷いし回数も遙に多く、それに手が混んでいる。単なる悪罵の他に、皮肉、転倒、侮蔑と多種類あり、執拗さもただならずである。これほど酷い目に会わされた先学は他にいないから、『資本論』のマルクスがマカロックを意識的に悪者扱いしたことは間違いない。

単なる悪罵にも「(ブルジョアの)お抱え医者マカロック」、「ブルジョア経済学者たとえばジェームズ・ミル、マカロック…」、「生意気な白痴のまねの達人なかんずくマカロック」等<sup>(75)</sup>があり、皮肉となると「かしこいバスティア、もっとかしこいマカロック」や「スコットランドの天才マカロック」<sup>(76)</sup>がある。ここまででもそうとうドギツイが、これが転倒や侮蔑となるともっと手が混んできて、執拗さがついて行けないほどになる。

転倒とは一度持ち上げておいて後で落とすことで一層酷くケチを付けることを言う。マカロック『原理』から「利得を求める押さえ切れない熱情、金に対する呪われた渴望はつねに資本家を規定する」を引用する。マルクスが自ら書いたと言っても通用しそうな名文である。ところがマルクスはこれに「もちろんこの見解はマカロックとその同類が、理論的困難に陥ったとき、たとえば過剰生産を論ずるにさいして、同じ資本家を一個の善良な市民にしてしまうことを妨げるものではない」<sup>(77)</sup>と付け加えて、マカロック悪玉説に転じてしまう。文脈上そうとう無理な付け加えだが、むしろ悪口を言うために名を出す必要があったから前記の文を引用したと解すると意味が良く解かる。もう一つ、リカードの(貿易の順逆と通貨量の多寡との因果関係に関する)説の先駆がバーボンだと自ら述べ、マカロック『経済学文献分類目録』がそのことを既に指摘している、と一旦はマカロックの学識を持ち上げた上で、続けてこの『経済学文献分類目録』は「無批判」で「不誠実」だ、なぜならマカロックは通貨主義を信奉しているためにオーヴァストーンにお追従をしているからだ、と付け加える<sup>(78)</sup>。付け加えが文脈上さらに無理になっていることは明らかで、理論的意味など皆無である。マカロックの悪口を言うために予めマカロックの名を出す細工をしておいただけである。

もう一つ、同じ『経済学文献分類目録』に関わって、「フォースター、アディントン、ケント、プライス、ジェームズ・アンダーソンを読んで、それらとマカロックの哀れな追従的多弁と比較

せよ」<sup>(79)</sup>がある。この書の、フォスター等々に対する評価は「お追従」Sycophantとは読めない。そもそもが読むに値する文献を列挙した読書案内であり、「批判的目録」と自称していた。紹介文中に一つホメ言葉があったくらいではお追従にはなるまい。なおアディントン『目録』には見出せなかった。前記のオーヴァーストーンに対しては、マカロックには確かに、晩年名論選集を四つも捧げたほどだからかなり恩恵を蒙ったのだろうが、『目録』のオーヴァーストーン紹介はお追従ではなく客観的紹介である。マルクスのひとくさりに理論的意味があるとすれば、信用論未完成のマルクスが、反権威主義的心情から抱いていた通貨学派嫌いを表明したことだろうが、通貨学派嫌いは何もここだけに登場するわけでもない。そもそもこの程度の評価を「お追従」と言うなら、マカロックが3ページ余りを費やしたマーチン激賞を何と呼ぶつもりだったのか。マルクスは不思議にマカロックのこのマーチン評価を素直に読み取っていないのである。『資本論』第一巻に『経済学文献分類目録』が登場するのは、上記二箇所、いずれもマカロックに非難を浴びせる手がかりとなっている。新MEGAには完全には信用しきれない部分があること後に述べる如くだが、それでもマルクスがブリュッセルノート以降マカロックを経済学入門の手がかりとし、マンチェスターノートではこの『経済学文献分類目録』を英文経済学入門の手がかりとして利用したことは判定できる。その書のペティ紹介のうち、労働価値説を含む『租税貢納論』をマルクスは見落としていたのではないか。それに気付いた後の悔恨の念が、上記のような理不尽な扱いになったのではなからうか。

## B—マーチン継承の捻じれ

マーチン『東インド貿易に関する諸考察』の扱いも捻じれている。まずは形式的書誌学的側面。マルクスは『資本論』中で、高く評価しつつ同書を7回引用したが、尽く再版『イングランドにとっての東インド貿易の諸利益』の名においてである<sup>(80)</sup>。BL（大英図書館）は再版しか持たなかったから、この引用自体はそれでも良い。が、マカロックの上記『経済学文献分類目録』は、同書については初版名と再版名を並べて掲げ、内容は全く同じだと指示した上で、都合3ページを超える、この『目録』最長の紹介を記していた<sup>(81)</sup>。マルクスはマンチェスターノート以来それを読んでいたし、『経済学批判』ではその箇所を、引用ページは誤ったものの明示<sup>(82)</sup>していた。さらに『剰余価値学説史』中には、ダヴィナントの東インド貿易論を引き合いに出しつつ、マカロックによってマーチンの書の初版名を知ったことを物語る文もある<sup>(83)</sup>。それなのに『資本論』では初版名を全く挙げず、マカロックが極めて慎重に著者はヘンリー・マーチンだと示唆したことは一層無視した。この示唆は1926年にP.J. トーマスがほぼ実証し<sup>(84)</sup>、1983年にマクラウドによって確認された<sup>(85)</sup>。マルクスがマカロックを支持していれば、マーチンの初期の利用者としての評価も得られ、さらにマルクス経済学者によるマーチン探索もあり得た。同じことはハリスについても生じ得たろう。

マルクスはマカロックの功績にしたいかないばかりに、知っていた初版名も著者に関する推測も、一切書かなかったように思われる。筆者の探索によればBLは初版を持たなかった<sup>(86)</sup>のだから、

おそらく初版を見たことはなく(マカロックに頭を下げれば見得たろうが)、再版名だけ書いていたのは当然とも言えるし、初版名や著者名推測を書かなかったのはいわば不作為の作為だから、それ自身道義的な罪ではない。むしろ、どこかで書き込んでおけば、後世の研究を促進したばかりでなく、彼自身その慧眼を讃えられたろうに、と言うまでである。マカロックへの偏見が逸失利益を生じたのである。

理論面実質面では、逆のマカロック追隨が逸失利益を生じたとも言える。マカロックのマーチン評価は、専らその分業論に関してである。マカロック『目録』のマーチン紹介は、「同義反復的だが、これは深遠で有能で最も才ある著作である。著者はおそらく工業における機械利用と安価な生産方法の利を、それが労働者階級にとっても社会の他の階級にとっても有害でないばかりか有利であることを決定的に示した最初の人物である。彼はまた分業の強力な影響を重要な論点に互って示し、スミスさえ超え得なかったばかりかかえって多くを得たであろうような巧妙適切な表現で説いた」<sup>(87)</sup>という文から始まる。その後、マーチンの主張の骨子を示す引用的要約が10パラグラフ続く。いわく― 東インドから安価な製品が輸入されても別途雇用機会が生ずるからイギリス製造業は壊滅しない。手鋸の代りに機械鋸、馬車輸送の代りに舂と機械を使えば同じ作業が遙に少ない人数で達成でき、多人数を使うのは国家にとって損失である。外国から安価なものを輸入するのは、神がイスラエルにマナを賜ったのと同じであり、それを拒否する政策はバカげている。われわれは英国製品を国内で消費するのに慣れていて、しかし小人数で供給出来るものを多人数で作るのは機械や水路を壊すと同様にバカげている。イギリスは海運に恵まれた土地であり、世界中の良いものを享受出来る。技能設備機械は労働を節約し、賃金を下げることなく労働コストを下げる、東インド貿易はこれを促進する。職布の例に見るように、イギリス産業の秩序と規則性を増し、同じものをより多くの職種によって作りながら全体の員数を減らし、個別職種の技能熟練を増しながら雇用は安定的になる。懐中時計のように多くの作業を要する製品も、一人の職人が個別の部品を作って後に組み立てるより、多くの職人が個別の部品製造に専念して別の人が組み立てれば、個々の職人の仕事はずっと完全になり早くなる」<sup>(88)</sup>。

―骨子の紹介は、拾われた限りでは正確であり、マーチンの文体の魅力まで伝えている。ただ、論点として欠け落ちたところがある。貨幣信用論もその一つ、分業や機械使用によって、賃金コストを下げ得るとする際に賃金率は一定のまま維持されると前提してしまったマーチンの欠点もその一つだが、特に比較生産費説に該当する部分の紹介が全く抜けた。マーチンの該当部分をそのまま引けば、「イギリスで作物を作るのに、インドから調達する際に必要な人手以上の人手を雇うことは、益を得るために雇える多くの人手を、益を得られないのに雇うことである。もしイギリスで九人の労働で小麦三ブッシェル以上作れないが九人の労働でどこか外国から九ブッシェル入手できるならば、九人を国内に雇っておくことは、彼等に三人分の仕事しかさせないことであり、六人を彼等なしにやれた、六ブッシェルの小麦をイギリスに齎すという益を生まない仕事に就かせることになる。これはイギリスにとって小麦六ブッシェルの、従って同じ価値の損失である。それゆえ、イギリスで九人の労働で十シリングの価値の工業製品を作り得るとし、同じ労働で外国から三倍の価値の製品を獲得出来るとしたら、この人達をイギリスの製造業で雇うこと

は、外国から二倍の価値の製品を入手するために雇うことができたかも知れない九人中六人を、益なしに雇ったことになり、それは明らかに国家にとって同額の損失になるのである」<sup>(89)</sup>。

『目録』のマーチン紹介はなお二つ続く。一つは著者名推測で、「スペクテーター」No.232,1711年11月26日号は、異なった人々を複合的な仕事の各部分に割り付けて労働と費用を節約する例として懐中時計製造を挙げている。その筆者はヘンリー・マーチン氏だと推測されているが、彼はその例をサー・ウィリアム・ペティから借りたと述べている。しかしわれわれの見た限りでは、ペティの著作にはそうした記述はなく<sup>(90)</sup>、その例はここで紹介しているパンフレットに現れている。すこし持つて回った言い方が大筋を追えば、マカロックはパンフレット『東インド貿易の諸考察』と、マーチンが筆者だとされている「スペクテーター」No.232は同じことを書いているのだから、パンフレットの著者はマーチンだろうと言うのである<sup>(91)</sup>。137年後にそれが正しかったことが実証された。もう一つの紹介文は、この優れたパンフレットがあったにも拘らず、その時には輸入禁止が行なわれたが、国内綿工業の発展によってついに1831年には関税がなくなった、という政策史である。

以上の紹介のうち終りの二点は後にMEGAを論ずるための材料として付け加えたものだから、ここでは無視して良い。問題はその直前に引いた、マーチンが比較生産費説に当る理論を述べたことである。

ここは、後にスミスが述べ、リカードが理論的に完成し、J.S.ミルが比較生産費説と命名した、労働価値説に基づく貿易論の原形が、経済学史上初めて現れた箇所である。マカロックの、上記引用的紹介は、この議論スレスレまでは行ったものの結局逸した。リカードに経済学を学びながら、晩めに成立した貿易論（リカード『経済学および課税の原理』第七章）の論理を掴み切っていなかったからである。事実マカロックの『原理』には貿易論がない。マルクスも同じだった。彼の『イングランドにとっての東インド貿易の諸利益』からの引用は都合七回<sup>(92)</sup>に互り、かなり後ろの方の、一寸気の付き難い部分にまで及んでいるから、相当丁寧に読んだと見て良いが、取り上げた論点は尽く分業に関わっており、貿易論には触れていない。マルクスはこの書を、実はマカロックが読み取った範囲でのみ評価していたのである。貨幣信用論は、この際さほど重要ではないが、マルクス自身結局完成し得なかった。比較生産費説は、マカロック同様リカードに学びながら、数値感覚の悪いマルクスには結局理解出来なかった。彼はこの種の貿易理論を遂に書かなかったし、議論を書き残したこともないようである。『資本論』第一巻第20章「労賃の国民的相違」は、リカードが比較生産費説を通じて解釈した、先進国後進国の間の貿易現象を、比較生産費的關係を理解出来ないマルクスが自らの言葉で言い直そうとし、価値実体的に熟練や労働強度の差によって説明しようと試みたが、救いようのない混乱に陥っているのである<sup>(93)</sup>。それに加えてマルクスは、賃金率が労働力需給の変動にも拘らず一定だとするマーチンの理論的欠点も、マカロックとともに見過ごした。

形式面ではマルクスは、マカロックの貢献を拒絶したために利益を失った。実質面では、リカードの貿易論を理解出来ない点や賃金率一定の誤りを見破れなかった点でマカロックと同水準だったため、紹介に何も付け加え得なかった。これがマーチン継承における捻じれである。

## 5. MEGA への疑問

筆者は MEGA いじりを専門にするものではなく、ましてや MEGA 信仰派ではない。それにここは一度書いたこと<sup>(94)</sup>の繰り返しでもある。ただ、本稿の研究を進める中でたまたま必要になった MEGA の一部に、作為が加えられているとしか解しようのないところがあることに気付いた。筆者程度の閲読で既に問題が出てくるとすれば、経典化などは論外で、マルクスの理論思想形成史を示す資料としての信頼性さえ疑われ、全文を再検討する必要が出て来る。これまでこの種の疑問が発せられたことがないそうだから、ともかく問題だけは提出しておき、その道の専門家による原ノート探索を俟つ。

問題はマカロック『経済学文献分類目録』からの抜粋として示されるマンチェスターノート、それも特にマーチン『東インド貿易の諸考察』の部分である。前述のようにマカロックの記述は見誤りようもないほど明瞭なものである。まずエジプト体の大型活字で初版名を記し、これが重要文献であることを示す。

### *Considerations upon the East India Trade*

8vo.London,1701

Republished with a new title-page, but without any other altetation, and entitled

The Advantages of the East-India Trade to England considered, wherein all the objections to that Trade are fully Answered. 8vo.London, 1720.

そしてこれに加えて、激賞と引用的要約による骨子の紹介とからなる、細字で3ページにも互る、結構長いマカロックの文章がある<sup>(95)</sup>。ところが、MEGA のマンチェスターノート中のこれに該当する部分<sup>(96)</sup>は、初版名なしにいきなり再版名から始まる。そしてそれに続く細字の文章は全体で20行足らずのひどく短いもので、英独チャンポンで書かれているが、内容的には、マカロックの原文の最後に当る政策史の箇所だけである。

これは一体どういうことだろうか？ こうした記述がマルクスの原ノートにあったままだとは考えられない。もしあったのなら、マルクスはよほど酷い上下乱視で精神不安定な、つまり一人前の学者としては通用しない欠陥を持っていた人物だったことになるから、そうは考えられない。とすればこれは MEGA の編集者が特定の意図をもって捏造したことになる。そしてその意図は推測し易い。マルクス無謬説的忠義立てである。

MEGA 編集者は、おそらく『資本論』におけるマカロック蔑視を十分心得ていたであろう。そこでまず、マーチン『東インド貿易の諸考察』は初版名でなく、一貫して再版名『イングランドにとっての東インド貿易の諸利益』で引用されていたから、マルクスのノートにも初版名があつてはならないと考えた。そこで、このうえなく見易いエジプト体の初版名がノートされていないことにした。それに続いて、マルクスがマカロックによる著者名マーチンを全く無視したことに気づき、ノート中のその部分を消した。その他のマカロックによる引用的要約も、一般にマルクスが蔑視していたマカロックによるものだから大して必要ではなかろうと考え、迂闊に残すと『経済学批判』や『資本論』におけるマルクスの、いささか無理なマカロック非難を暴露する危険が

あるから、纏めて存在しないことにした。

……そう推測すると、話は極めて解かり易くなる。現在 MEGA で見られるこの部分は、編者熟慮の上、原ノートから大幅に削除した残骸なのである。彼が考慮しなかったのは、おおもとのマカロック『経済学文献分類目録』が、比較的閲覧容易な書物だったことだが、原資料に当ると小細工がすぐバレるという気遣いは、『資本論』や『経済学批判』にマルクス無謬主義的注釈を付す習慣が出来て以来払われてこなかった。MEGA のこの部分の編集者も、そんな心配はしなかったであろう。そして彼の最大の失敗は、これによってせつかくの MEGA がマルクスの思想理論形成史の資料としての信憑性を根本から疑われることになるが、そのことより、彼自身の政治的安全確保の方を重視したことである。

もう一つ。マカロック『目録』のノートに、マルクスの書き込みで「マカロック氏は本当に何も知らない」Herr McCulloch überall unwissend とあることになっている<sup>(97)</sup>。これもどこまで真実か疑って良い。これだとマルクスは、経済学者として駆け出しで、まだ大して書物の名も知らず、むしろマカロックの諸著によってそれを学んでいたうちから、マカロックを「何も知らない」とバカにしていたことになる。口の悪いマルクスのことだから、ペティ『政治算術別論』に、分業の例として懐中時計製造が挙げられていて、マカロックがそれを失念していたのに自分がたまたま気付いたのでそう言ったのかもしれないが、いささか飛躍的過ぎる。編集者がマルクスのドイツ語に小さな細工をするか読み取りをわずかに歪めれば、マルクスが実際にこう書いたとも主張出来る。正読・捏造、双方あり得るところだから、日本の MEGA 研究者の誰かに、一度原ノートを見てきてもらいたい。

## 註

- (1). 経済理論学会第 55 回大会口頭報告、馬場宏二「スミス・マルクスの資料操作とマカロック」2007 年 10 月 20 日。
- (2). 上記口頭報告から、本稿と別に、姉妹編「アダムスミスの犯罪」(大東文化大学『経済論集』第 90 号、2007 年 3 月掲載予定)を書いた。
- (3). 『経済学批判』の貨幣論史(岩波文庫版、211 ページ)は、貨幣数量説を唱えたものとして、17 世紀イタリアの経済学者について、ロック、「スペクテーター」1711 年 10 月 19 日、モンテスキューとヒュームと列挙しているが、これはスチュアート(小林昇監訳/竹本洋他訳『経済学原理』第 1 第 2 編 1998 年 名古屋大学出版会 361 ページ)にある列挙の孫引きである(参照、高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』IV841 ページ)。「スペクテーター」紙の同日付 200 号はルイ 14 世の征服事業を政治算術的に評価すればマイナスだと指摘したもので、貨幣論ではない。需給の僅かな不均衡が価格の暴騰暴落を引き起こすという指摘を含むから、何よりも需要供給を重視するスチュアートなら価格論に含めることはあり得るが、マルクスのここでの文脈はそれではない。この号を直接読んでいなかったのではないか。また、『経済学批判』の商品論の中に、ウィリアム・ペティが「労働は富の父であり、土地はその母である」と言ったとあるが、この文句は『租税貢納論』にあり、マルクスは同書をまだ読んでいなかったはずだから耳に覚えた名文句を記したことになる。
- (4). 『経済学批判』でフランクリンが、労働価値説を 1719 年に書いて 1721 年に印刷した論文で定式化した(岩波文庫版 62 ページ)と述べているが、フランクリンは 1706 年生まれ、いくら早熟でも 13 歳では労働価値説を

説くことは出来まい。多分10年ほど間違えている。同様な年次の誤りは「デイリー・トリビュン」に書いた東インド会社の歴史にも見られる。マルクスは東インド会社が真に始まったのは1702年だと述べているが、この年は新旧両会社に分裂していたのが統合を模索し始めた一駒に過ぎず、マルクスが別の年と勘違いしていた可能性がある。東インド会社の歴史については『国富論』第三版第五編第一章第三節第一項の東インド会社論の方がよほど緻密である。

- (5). E.C.Mossner, I.S.Ross ed., *Correspondence of Adam Smith*, Oxford,1977.
- (6). op.cit., P.113.
- (7). 詳しくは馬場宏二「ペティと『国富論』」大東文化大学『経済論集』第87号、2006年7月。但しチャールズ・スミスが「政治算術」を使っていないことは本稿で確認した。
- (8). *Correspondence of Adam Smith* op.cit.,PP.163~164.
- (9). 参照、ペティ著大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』岩波文庫、呈辭。
- (10). Edmond Fitzmaurice, *The Life of Sir William Petty*, London,1895.
- (11). 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論3』岩波文庫、66~67ページ。この訳は邦文はよくこなれているが、キャンナンの小見出しもなく、註や索引が恣意的なので使い難い。現在最も普及している邦訳であろうから、以下は主としてこの訳のページを掲げることにする。
- (12). Charles Smith, *Three tracts on the corn trade and corn laws*, London,1766.
- (13). 前掲『国富論3』15,19ページ。その他の引用は『国富論1』347~348(?)ページ、『国富論2』313ページ、『国富論3』66ページ。
- (14). 『国富論1』342ページ。
- (15). 『国富論』索引は、馬場宏二「『国富論』の"企業家"」大東文化大学『経営論集』第12号、2006年9月、79~80ページで検討した。
- (16). シュムペーター 東畑精一訳『経済分析の歴史2』、岩波書店、439ページ。
- (17). 参照、前掲馬場「ペティと『国富論』」『経済論集』49~50ページ。
- (18). *Correpondence of Adam smith*, op.cit.,PP.163~164.
- (19). 前掲『国富論1』、18ページ、訳註(1)。
- (20). 小林昇氏の表現を借りれば「スミスはあるいは、『原理』自体の示すように巧妙練達の批判者でもあったスチュアートの反論をあらかじめ避けようとしたのかもしれない」(小林昇監訳、竹本洋他訳、J. スチュアート『経済の原理』第3.第4.第5編、1993年、名古屋大学出版会「監訳者まえがき」iiiページ)。但し本文で示唆したように、スミスの側には学問一般よりもっと俗物的次元の対抗意識があったのかも知れない。
- (21). *Correpondence of Adam Smith*, op.cit.,P.164,n4., また、I.S. ロス著、篠原久・只腰親和・松原慶子訳『アダム・スミス伝』2000年、シュプリンガー・フエアクラーク東京社、172ページ。
- (22). Sir James Steuart, *The Principles of Money, applied to the present State of the Coin of BENGAL*, London,1772.
- (23). Cambell, Skinner, Todd ed., *Adam Smith, the Wealth of Nations* 1981, P.751.
- (24). R.L.Meek,D.D.Raphael,P.G.Stein ed, *Lectures on Jurisprudence*, 1978,Oxford UP
- (25). 筆者自身の考証は馬場前掲『もう一つの経済学』59~60ページに示してあるが、その後、御崎加代子滋賀大学教授から口頭で御教示を得、確認できた。
- (26). Sir James Steuart, *An Inquiry into the Principles of political Economy*,1767.
- (27). Sir William Petyy, *Political Anatomy of Ireland*, Londn.1691, ペティ著、松川七郎訳『アイアランドの政治的解剖』岩波文庫、133ページ。
- (28). Antoyne de Montchrétien, *Traicté de l'economie politique*, paris, 1615. この「エコノミー・ポリティーク」が経済学の意味であること、またペティがモンクレチアンからそれを継承した可能性があることについては、



馬場前掲「ペティと『国富論』」46 ページを見よ。

- (29). キャナン版の律儀な邦訳、大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫の文献目録、で巻とページで示すと、I 137, 150, 228, 252, 290, 297, 303, 304、II 134, 381, 424.
- (30). 馬場宏二「富概念の推移」大東文化大学経済研究所『経済研究』第20号2007年3月、99ページ。
- (31). このアイデアは馬場前掲「ペティと『国富論』」の「追記」以来である。
- (32). スキナーらが「興味ある」変形とした箇所だけを拾うと、『国富論』第2編第3章の「俳優の朗読や演説家の熱弁や音楽家の楽曲は生産された瞬間に消滅する」が『原理』第2編第26章「内的実体のないものはすぐ消える」に、『国富論』第4編第2章の「見えざる手」の後ろに続く、公益追求を意図した場合より私益追求を意図した方が公益推進に役に立つと言う周知の文句が『原理』第2編の序言の「もし私益追求に代わって公共心が個々人の行動の動機になるなら全てのものを台無しにしてしまう」に、『国富論』第5編第2章の物品税に関して必需品と奢侈品の区別を論じているところが、『原理』第2編第21章の生理的必要物と政治的必要物の区別に照応する。他にも有効需要とか奢侈品に対する欲望には限度がないとか、商人が利潤が増えるとか奢侈化する等々の先行例が見出せる。
- (33). 岩波文庫版『国富論1』18ページ。
- (34). スチュアート『原理』はアムステルダム銀行について3ヶ所20ページ余り述べ、その前の鑄貨論30ページを含めると60ページ近くになる。『国富論』も、対抗上か「アムステルダムの預金銀行に関する余論」を10ページほど書き込んでいる。
- (35). 『経済学批判』岩波文庫版、222ページ。
- (36). 同上223ページ、『資本論』第一巻第3章註(78)でも繰り返している。
- (37). 『資本論』第一巻第12章註(44)。
- (38). 『経済学批判』岩波文庫版、58~60ページ。特にそこに含まれる長い註が問題になる。厄介なことにこの註は、もともと脚注なので通し番号がなく現行版にもないが、アドラツキー版に註(16)となっていて、岩波文庫版を含めそれが入っている邦訳もある。さらに厄介なのは内容で、マカロックが不注意から、ペティは分業の例として懐中時計製造を取り上げたことはないと述べたのに対してマルクスが得たりかしこしと非難、それも曲解的非難を浴びせたことである。参照、馬場宏二「『経済学批判』の批判」大東文化大学『経済論集』83号、2004年7月、馬場宏二『もう…つの経済学』2005年、御茶ノ水書房、第11章。
- (39). 第10~12章で計7回。参照、馬場宏二「『資本論』の一文献」大東文化大学経済研究所 Working Paper, No.22, 2002年9月、馬場宏二『マルクス経済学の活き方』2003年、御茶ノ水書房、第14章。
- (40). たとえば『資本論』第一巻第一章、註(32)。
- (41). 例えばカンティロンを発掘したつもりのジェヴォンズは、マカロック『目録』が、スミスにしては珍しくカンティロンの書を挙げたとして、リシャルでなくフィリップ・カンティロンの書を示しているのを粗雑だと嘲笑している(W.S.Jevons, Richard Cantillon and the Nationality of Political Economy, *Contemporary Review*, 1881)。確かにここは粗雑な点の一つだが、ペティ、ハリス、マーチンに関するマカロックの貢献は全く無視されている。マルクスがカンティロンをかなりの程度まで考証していたのに、ジェヴォンズはこれも無視した。『資本論』第一巻第19章註(54)。因にマルクスも、ペティ『政治算術別論』にある懐中時計分業の例を見過ごしたマカロックの考証をしつこく衝いている(本稿註(38)参照)のに、リシャルとフィリップの混同に関しては不思議に何も言っていない。
- (42). *A Discours on the Rise, Progress, Peculiar objects and Importance of Political Economy*, Collected Works of J.R. McCulloch. この本はすぐ仏訳が出たらしい。マルクスがブリュッセルノートに記しているのは仏訳である。
- (43). *The Principles of Political Economy*, 4th ed., 1849, Collected Works of J.R. McCulloch.

- (44). *Discours*, op.cit., P.37,40.
- (45). *Principles*, op.cit., P.377.
- (46). Charles Ganilh, *Des Systemes d' economie Politique*, T.1-2, Paris,1821,pp.30~7
- (47). J.R.McCULLOCH, *The Literature of Political Economy, A Classified Catalogue*... London,1845, Reprinted 1991, by August Kelly.
- (48). op.cit., pp.211~212.
- (49). ロッシャー、杉本栄一訳『英国経済学史論』同文館、1929年、145ページ。
- (50). J.K.Ingram(?), "William Petty" in *Encyclopedia Britanica*, 1885.
- (51). C.H.Hull, Introduction to the *Economic Writings of Sir William Petty*, 1899.
- (52). 参照、馬場前掲『もう一つの経済学』267ページ。
- (53). 『経済学批判』前掲註。
- (54). J.R.McCULLOCH ed., *A Select Collection of Earley English Tracts on Commerce*, London, 1856.
- (55). J.R.McCULLOCH ed., *A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts on Money*, London, 1856.
- (56). Anonym, *Considerations upon East-India Trade*, London, 1701.
- (57). Joseph Harris, *Essay upon Money and Coins*, London, 1762.
- (58). 日本で最初にマーチン『Considerations……』を検討した久保芳和氏は、恩師堀徑夫が外遊で持ち帰っていたMcCULLOCH, *A Select Collection*… で読んだという。ハリスについてはハリス著、小林昇訳『貨幣・铸貨論』1975年、東京大学出版会の「訳者解説」を見よ。
- (59). 「セイの法則」なるものが学説史上存在しないことはマーク・ブログ著、中矢峻博訳『ケインズ以前の100大経済学者』同文館、1998年、231~232ページを見よ。しかし実際には、「すべての売りは買いである」とケネーが述べていたことをマルクスが指摘していた。『資本論』第一巻第一章、註(66)。
- (60). マカロック研究は一度探索して見て見出せず、その後も存在しないものと思っていたが、原伸子法政大学教授の御教示で、近年、伝記作者オブライエンに依拠したものが現れたことを知った。松井名津「J.R. マカロックとマルサス人口論」飯田佑康他編『マルサスと同時代人』2006年、日本評論社所収。だがこれは学史家マカロックの評価ではない。
- (61). 参照、馬場前掲『「経済学批判」の批判』馬場『マルクス経済学の生き方』第11章。
- (62). 『経済学批判』岩波文庫、34ページ。
- (63). 『経済学批判』岩波文庫、62~64ページ。フランクリンの文はB. Franklin, *A Modest Enquiry into Nature and Necessity of a Paper Currency*, Albert Syth ed., *The Writings of Benjamin Franklin*, 1970, vol.2, P.144.
- (64). ペティ著、大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』岩波文庫、76,77,89~90,155ページ。
- (65). これが引き写しであることは、Ingram, *A History of Political economy*, London 1888, C.H.Hull, Introduction to the *Economic Writings of Sir william Petty*, op.cit. が指摘しているが、指摘がなくとも読み比べればすぐ判る。
- (66). 1858年4月2日付けマルクスからエンゲルスへの手紙。
- (67). 自分で多少調べたが判らず、原伸子法政大学教授・福留久大九州大学名誉教授に伺ってみたが依然判らない。
- (68). マルクス、高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店。
- (69). 新MEGA IV-3.
- (70). 新MEGA IV-4.
- (71). 「資本論」国民文庫版、第一巻第一章 註(17a)。
- (72). エンゲルス、栗田賢三訳『反デューリング論下』岩波文庫、144ページ(同書第二部第十章はマルクスの執筆

- とのこと)。
- (73). 馬場宏二「『資本論』も読み方」大東文化大学『経済論集』82号2004年2月、馬場前掲『もう一つの経済学』に再録。
- (74). 『資本論』第一卷第十五章第一節註(10)、第二卷第十九章第三節、等。
- (75). 『資本論』第一卷、第五章第二節、第10章、第13章第6節註(215)。
- (76). 『資本論』第一卷第五章第二節、第10章第13章第6節註(216)。
- (77). 『資本論』第一卷第四章第一節註(9)。
- (78). 『資本論』第一卷第三章第三節C註(109)。
- (79). 『資本論』第一卷第24章第二節註(209)。
- (80). Anonym, *Advantages of East-India Trade to England*, 1720.
- (81). J.R.McCULLOCH, *The Literature of political Economy*, op.cit., PP.99~103.
- (82). 参照、馬場前掲「『経済学批判』の批判」『もう一つの経済学』222~223ページ。
- (83). マルクスは『剰余価値学説史』の中でダヴィナント『東インド貿易に関する一論』に触れて、「この著書はマカロックによって引用されている『東インド貿易に関する諸考察』と同じものではない」と注意書きしている(『剰余価値学説史』第四章、大月書店版『マルクスエンゲルス全集』26、196~197ページ)。私的なノートのもりだっただけであろうが、ここではマーチンの本の初版名をマカロックによって知り得たことを、問わず語りに述べている。
- (84). P.J.Thomas, *Mercantilism and the East-India Trade*, London 1926,P.89,P.94. 参照、馬場宏二「P.J. トーマス『重商主義と東インド貿易』」大東文化大学『経済論集』89号、2007年7月。
- (85). Christine Mcleod, Henry Martin and the Authorship of 'Considerations upon the East-India Trade' in *Bulletin of the institute of Historical Reserch*, vol.LVI,1983.
- (86). 馬場前掲『もう一つの経済学』124ページ、註(62)。
- (87). J.R.HcChulloch, *Literature of Political Economy*, op.cit.,P.100.
- (88). op.cit.,P.102.
- (89). *Considerations upon East-India Trade*, op.cit.,Pp.55~56.
- (90). J.R.McCULLOCH, *Literature of Political Economy*, op.cit.,P.102.
- (91). こう解釈すれば、ここは極度に臆病な表現だが、マカロックの主張は筋が通っており、先見性があったことになる。ところがマルクスはこの筋を読もうとせず、無視するか非難の材料に使おうとした。それが、幾重にも捻じれた曲解に基づくものであることについては、簡単には書き切れない。詳しくは馬場前掲「『経済学批判』の批判」、馬場『もう一つの経済学』、226~237ページを見よ。
- (92). 馬場前掲『マルクス経済学の活き方』第14章「『資本論』の一文献」を見よ。
- (93). 馬場宏二「古典派の比較生産費説」、大東文化大学経済研究所『経済研究』研究報告17号、2004年3月、馬場前掲『もう一つの経済学』第八章、165~170ページ。
- (94). 馬場宏二「ベテイ経済学の継承」、前掲馬場『もう一つの経済学』271ページ。
- (95). J.R.McCULLOCH, *Literature of Political Economy*, PP.99~103.
- (96). MEGA,IV-4,Text S193.
- (97). aao,S189.